

<参考図版 2>

林 復齋 (はやし ふくさい)

寛政 12 (1800) ~ 安政 6 (1859) 年。

<sup>いみな</sup>諱は 燿 (あきら)。大学頭 (だいがくのかみ)。

江戸幕府の儒官で、林羅山の子孫です。

復齋は、嘉永 7 (1854) 年 2 月、日本の全権首席として、横浜でアメリカ使節のペリーと交渉し、日米和親条約に調印した人物です。

林家は羅山の代から祝園村に 50 石の所領を有していました。つまり、復齋は祝園村を治める領主の一人でもあったのです。

ペリーと交渉し、日米和親条約を結んだのは、祝園村の殿様でもある私です。



東京大学史料編纂所 蔵

No.13

森島清右衛門書状

(「嘉永七寅年二月十六日出立江戸御屋敷より到来状翌卯年十一月迄在勤十二月五日帰宅」の内)

[嘉永 7 (1854) 年] 2 月 27 日付

森島國男家文書 A1146-1

嘉永 7 (1854) 年 2 月 27 日、祝園村の森島清右衛門は江戸に出張する道中、東海道の神奈川宿付近で黒船を目の当たりにし、その様子を自宅の家族に手紙で知らせています。海岸から 30 丁~1 里 (約 3.3~4.0km.) 程に停泊中のアメリカ船 6 艘がよく見えたということです。〈武家による警備は厳重だったが、穏便な対応をとったものと見え、全く平静であった〉とも記しています。

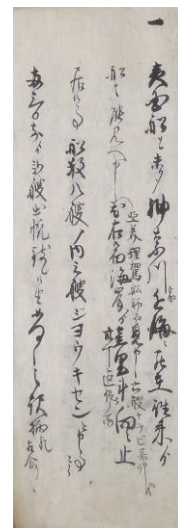
この冊子は、代官森島清右衛門が、江戸に居住する領主旗本天野家へ長期出張中に、江戸から祝園村の実家に送った手紙を綴じて整理したものです。

(前略)

一 夷国船も未夕神奈川宿近海ニ罷在、往来より船者能見へ申候【垂美理駕船初而見申候、六艘ナラビ居申候】、尤右宿海岸より壱里計か【卅丁迄位ノ所】向ニ止り居候事、船数八艘ノ内三艘、ジヨウキセンと申事ニ候、兩三日前より式艘出帆致し候由、如何く之訳柄歟、相分り不申候、とりぐの風説を道中筋ニ而承り不分明事、猶後便可得貴意候、神奈川宿より江戸迄夫々御出張有之【嚴重之御固メ御陣ハ不残御幕張有之候事】、御用宿ニ罷成有之、泊り等都合不<sub>レ</sub>宜事ニ候、併穩之御取計与相見へ、一向し<sub>レ</sub>ずかなる事ニ御座候、先者無事着御安意被<sub>レ</sub>下度迄、目出度可得貴意、餘者近々壱封可差出、其節萬々可申上如此御座候、早々謹言

二月廿七日認

清右衛門

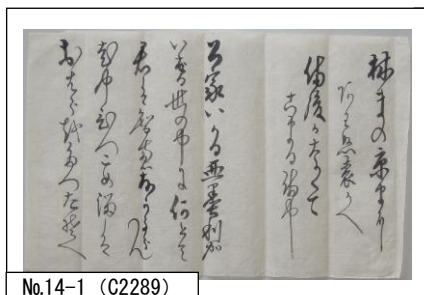


No.14-1~3

落首

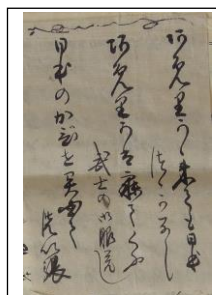
年未詳 (江戸時代後期)

森島國男家文書 C 2289・C2290・C2340



No.14-1 (C2289)

林まの京まに  
あわぬ表かへ  
備後かなへて  
こまる備中  
公家いかる垂墨利加  
いばる世の中に何とて  
君は智恵なかるらん  
老中ひつこめ溜は  
おはらをたつたそへ



No.14-3 (C2340 部分)

御内々之事  
あめりかゝ来てても日本  
つゝかなし  
あめりかは寝てくふ  
武士の御脇差し  
日本のかびを異国で  
洗い張



No.14-2 (C2290 部分)

皆人に林したてられ  
きてみれば  
公家にとわれ  
てはじを大学  
世の中ハ忠と欲との  
堺町東あつま西は  
九重  
林家此度ハ儒者も  
まにあわず  
たわけもの  
もへびの  
錦金のばちく  
大学が五経の山を  
孟子あけ論語  
同断是も中庸

幕府が開国を決めたことに対して、日本国内では反対する人も大勢いました。武力を背景に東アジアや日本に進出してきた欧米諸国に対する反発や危機感から、外国を排斥する「攘夷」の思想が広まりました。幕府や関係者を批判したり皮肉ったりする戯れ歌（落首）も多く作られました。

日米和親条約に調印した林復斎（大学頭）が、安政4（1857）～5年に京都を訪れ、今後は外国との通商が避けられないと朝廷に説いた時には、復斎を非難する落首がたくさん作られました。復斎は祝園村の領主の一人でもあり、祝園村の森島清右衛門は気になって、これらの落首を書き留めたのかもしれませんが。

復斎らが行ったペリーとの条約交渉については、長年否定的な見方が主流でしたが、近年では一定の評価をする研究も登場しています（井上勝生『開国と幕末変革』、同『幕末・維新』）。

No.15 (写真展示)

旧記

嘉永5（1852）年～  
太田直一家文書 121

下粕村鞍岡神社の神主太田直信が記した幕末の記録。

嘉永7（1854）年、再度のペリー来航を受け、神道の宗家である吉田家（京都の吉田神社神職）は配下の神職に対し、「天下泰平、武運長久、異国降伏」を祈願するよう命じました。

奉御祈禱天下泰平御武運長久異国降伏祈所 嘉永七年寅三月八日 板札認方 祭主太田对馬藤原直信	当社 二日始メ 一七日之間 八日迄	備物 神酒 最寄八ヶ村 下粕 上粕 木津 洗米 祝園	神拝 中臣 十二座 七日之間 三種 修之 天王 稲八間 東畑 飯岡	此度異国船渡来二附、 天下泰平、御武運長久、異国降伏、御祈可被抽丹成 （誠）、右之通り御沙汰二付、則最寄神職中申合セ、 三月朔日より十一日迄、八ヶ村相勤申候	嘉永六丑年五月下旬より異国船渡来ス、 相州浦賀表六般（艘）程着、六月二日より十二日迄引合、 江戸御府内大混雑、七月二引、又翌年寅正月十五日二 渡来ス、諸大名御固、筆紙ニ難尽故略之 右二附、丑暮より神社仏閣御祈被仰出、寅二月下旬吉 田殿ヨリ配下神職中江、左二被仰渡候
--	----------------------	-------------------------------	--	---	---

これをうけて南山城各地の神社でも異国降伏の祈禱を実施しました。鞍岡神社では3月2日～8日、祝園村・東畑村・（北）稲八間村などでは3月1日～11日の内7日間、祈禱を行いました。

\*この史料の写真は、『せいか歴史物語』（精華町、1997年）61頁に掲載されています。



No.16

いこくこうふくきとうふだ  
異国降伏祈禱札

嘉永 7 (1854) 年 3 月 4 日  
縦 78.8×横 17.0cm  
武内神社 蔵

展示No.15 に記されていたように、京都の吉田家（吉田神社神職）からの命をうけ、嘉永 7 (1854) 年 3 月、北稲八間の武内神社でも 7 日間にわたって異国降伏の祈禱が行われました。武内神社には、この時におさめられた祈禱札（木製）が現存します。当時の攘夷の風潮を今に伝える重要な資料です。

祈禱札には 3 月 4 日の日付がありますが、すでに前日の 3 日に日米和親条約が遠く横浜の地で締結されていました。賛否両論あるなか、幕府は日本が開国する道を選択したのです。

嘉永七歳  
天下泰平御武運長久異国降伏如意祈所  
甲寅三月四日 祭主田中豊前正紀吉福



No.17

瓦版 御貿易場（横浜図）

安政 6 (1859) 年 5 月  
森島國男家文書 C2283-4

安政 5 (1858) 年、日本はアメリカ・オランダ・ロシア・イギリス・フランスとの間に通商条約を結び、翌 6 年から横浜・長崎・函館で貿易が開始されました。これは、開港場となった横浜の市街地を描いた瓦版です。地図の上段には貿易開始に伴って横浜に進出した商人の名前が列挙されています。

今年世界遺産に登録された富岡製糸場に代表される生糸（絹糸）や、山城地方の特産品である茶が、幕末維新期の日本の二大輸出品であり、横浜港から世界に輸出され、外貨の獲得に大きく貢献しました。

